

提出日：令和 3 年 2 月 23 日

所属：獣医学部 動物応用科学科

氏名：菊水健史 職位：教授

役職：動物応用科学専攻主任 研究推進・支援本部長

I ティーチング・ポートフォリオ

1. 教育の責任（教育活動の範囲）

科目名	学科・専攻	必, 選, 自	配当年次	受講者数
動物人間関係学	A	必	2	144
介在動物論	A	選	3	60
動物人間共生論	A	必	1	144
地球共生系サイエンスワーク	全学	自		10
乗馬応用実習	A	選		40

動物人間関係学：動物人間関係学は、動物応用科学全般の基盤ともいうべき学問である。イヌなどの伴侶動物やヒトの生活を支える家畜動物、それら動物たちとヒトとの関わり方について歴史的背景とともに理解できるように工夫する。さらにその動物種ごとの生理的ならびに行動的特性を学習し、適切な動物との関係性のあり方について考察できるように学生に自主的に学んでもらう。

介在動物論：ヒトと動物の共生は互恵的关系を構築してきた。この一端が、医療場面などにも活かされつつある。ヒト医療場面における動物介在療法の利用対象となる個々の疾患の概要およびその治療法と介入方法の例を学ぶ機会を与える。そこから「なぜ効果があるのか」の議論の道筋を見出すための知識を、最新の論文を読み解くことで身につけ、今後のヒトと動物の共生を考察してほしい。

動物人間共生論：「動物人間共生論」は、動物応用科学全般の導入学問として位置づけている。「人と動物の関係」の歴史全般を知り、将来の展望を切り開く能力を身につける。最古の仲間（家畜）であるイヌなどの伴侶動物、ときには「有害」になる野生動物、さらにそれら動物たちとの関係を歴史とともに理解し、家畜の有用性を考え、また動物たちとのより良き共生を可能にする能力を身につけ、この先4年間の修学意欲を高めることを目指す。

地球共生系サイエンスワーク：研究によるヒト社会、動物関連領域の発展は人類の発展に必要不可欠である。その最先端の研究を自主的に学ぶ場として提供する。本学が平成28年度に選定を受けた私立大学研究ブランディング事業「動物共生科学の創生によるヒト健康社会の実現」の研究成果を理解し、これら研究成果やそのプロセスをアクティブラーニング的に学ぶことで、自らの卒業研究や「地球共生」にどう生かしていくかを考える力を身につける。

乗馬応用実習：馬実体験を介した心身への影響を測定し、その解析方法と効果を測る科学的手法を身につける。決して技術論に落ちず、データサイエンスの素質をもって、ヒトと動物の関

係性を明らかにする仕組みをいれる。

2. 教育の理念（育てたい学生像，あり方，信念）

基本的には、「学生の学問に対する興味を高める」「減点方式ではなく加算方式を取り入れて、アクティブラーニング的要素を取り入れる」「双方向性を重要視し、授業中に学生に対する質問を多く投げかける」「成果物の良いものを例として出し、欠点指摘ではなく、優秀点の評価型とする」を通して、学生が自主的に学び、自分の興味を追求できるようにする。その中で、データサイエンスやサイエンスリテラシーが次第に身につくように工夫する。これを通して、答えのない実社会で、臨機応変に対応して、自主的に作業し、成果をだせるような人材育成を目指す。

3. 教育の方法（理念を実現するための考え方，方法）

「学生の学問に対する興味を高める」「減点方式ではなく加算方式を取り入れて、アクティブラーニング的要素を取り入れる」「双方向性を重要視し、授業中に学生に対する質問を多く投げかける」「成果物の良いものを例として出し、欠点指摘ではなく、優秀点の評価型とする」です。

アクティブラーニングについての取組

上述の通り、学生自身が課題に対して調査し、課題を提出するなど、多くの座学科目でアクティブラーニングを取り入れている。実習においても、技術習得に加え、課題や目的を設定させ、その目的から、理論仮説、作業仮説の設定、データの解析、考察を自らが実施しており、深いアクティブラーニングが実施できている。

ICT の教育への活用

授業中に出す課題に関しては、その場で提出を求めているため、すべての学生がPCを用いて参加することになる。コロナ前はPCルームでの授業であったが、コロナ後も同様の内容である（ただし、締切日を延長）。また実習においても、データシェアリング、解析の共有、スライド発表もすべてオンラインでできるように指導し、ICTはフル活用している。逆にICTを使わない授業、実習はやっていない。

4. 教育方法の改善の取組（授業改善の活動）
<p>①<u>教育（授業，実習）の創意工夫（A）</u></p> <p>②<u>学生の理解度の把握（B）</u> 課題内容は確認しているが、理解度としての把握は困難。確認テストを最終授業で実施することにした。</p> <p>③<u>学生の自学自習を促すための工夫（A）</u></p> <p>④<u>学生とのコミュニケーション(質問への対応等)（B）</u> 授業中だけでは時間が足りない。メールなどで自由に質疑できるようにした。</p> <p>⑤<u>双方向授業への工夫（B）</u> 上記同様</p> <p>※A（十分実施している） B（実施しているが十分でない） C（うまく取り組めていない）</p>
5. 学生授業評価
<p>①<u>授業評価の結果をどのように授業に反映させましたか。</u> シラバスとの一致が悪かったため、シラバス内容を具体化させた</p> <p>② <u>①の結果はどうでしたか。</u> 一昨年度よりは上昇した</p> <p>③ <u>②を踏まえて次年度はどのように取組みますか。</u> 初回の授業で授業方針を明確に伝え、また学生の成績評価に関しても、明瞭に伝えることにした。</p>
6. 学生の学修成果
<p>① <u>学生の成績向上に資する取組を何か考えていますか。</u> 課題に対するポイントの説明、データサイエンスにおけるデータの扱いなどを、説明し、サイエンスリテラシーの向上を目指している。いくつかの科目では、小論文課題を複数回提出させている。毎回の提出後、文章構成や書き方など、ポイントを説明。優秀な課題に関しては、実名をあげて紹介している。</p> <p>②<u>教育活動によって得られた学生の成果及び学生・第三者からの評価</u> とくになし</p>
7. 指導力向上のための取組（FD 研究会参加状況）
<p>オンラインで参加し、教育理念の構築の重要性がわかった。この概念形成をもとに、教育構成を再考している段階にある。</p>
8. 今後の目標（理念の実現に向かう今後のマイルストーン）
<p>サイエンスリテラシーとコンピテンシーの向上を目指し、授業実習においてさらにこの観点を入れた授業実習に取り組む。</p>
9. 添付資料（根拠資料）（※）資料名のみ